三壩河（幅四米突能く徒渉し得べし）を高家營（一名多懊）を過ぎて截河（水幅十數米突能く徒渉し得べし）を渡り、懷安、何家庄、昌龍を經、行程約十里、豐樂堡に入る。盖し二十里堡附近は村落多く、田地亦少からず。四十里堡は一の民蒙學堂を有し、三十里堡は土寨點々更に人の住む無く、其の他家のみ存し人影を絶つ處、比々相繼ぎ、且つ沿道土民の家屋は、必らず土寨に據りて、其の上方に銃眼を有する等、長へに回亂慘劇の名殘を示したり。

二十八日午前三時三十分豐樂堡を發す。

乾坤、唯々我鐵蹄の音、車輪の響あるのみ。凍天尚ほ暗く、寒風人を襲ひ、寂寞たる約二百米突、水幅僅々二米突。柔遠を過ぎて八壩河を渡る。河幅十里堡（一名頭士壩）十里堡東崗坡等を通過して行程約十三里、永昌城に泊す。此間前者と同じく、共に徒渉容易なり。八壩堡、落風堡、回々舖（一名四十里舖）三十里堡、二地形は、昨日の如く大平野を成して、其西南方なる武當山即ち涼華山脈、其東北方なる衆峯嶺脈は、漸次相接近しつゝ西走し、隨て平野も亦漸次に狹縮し、東北に向て緩なる降傾斜を爲す。

永昌城は人家約七百餘、磚製の城壁を繞らし、縣衙門あり、學堂なし。輸入品は